

茅場再生で新たな価値

エネコエコパークの正式名称は「生物圏保存地域」(B.R.)バイオスフェア・リザーブ。国内で新たにB.R.となった「みなかみエネコエコパーク」(2017年6月登録)は群馬県みなかみ町全域と、隣接する新潟県魚沼市などの一部で構成。利根川の源流地を擁するみなかみ町では、里山の暮らしを尊びてきた草地や茅原、国有林「赤谷の森」の保全などに力を入れている。

ススキの枯れ草が赤い炎に包まれる。みなかみ町の北、藤原地区上ノ原「入会」の森で先月29日、茅場の野焼きがあった。市民団体「森林撃書水」(事務局・千葉市)のメンバーや地元住民、学生ら約70人が集まり、火入れ作業な

群馬・みなかみ 国有林「赤谷の森」保全

ど進んだ。「茅原は放置すると樹木が入り込む。草を焼いても地中の根茎は残るので影響は少なく、植物の芽吹きを助ける」と青水の委員長で元林野庁職員の高野洋さん(69)は言う。上ノ原のススキは茅葺き屋根の材料などに使われ、地域の集落(入会地)として維持管理されてきた。だが、生活の変化で量は減少。そこで「茅原の生態系を守り、新たな芽」とススキを「利根川の水の恩恵を受ける下流域の首都圏住民らが青水を結成し、一度は途絶えた野焼きを04年、約40年ぶりに復活させた。

再生した茅は、各地で保存される茅葺き屋根の修繕に利用され、東日本大震災で被災

した福島では木造仮設住宅の屋根の断熱材にも用いられたという。青水では「茅原は流域で生きるみんなの公共財」と位置づける「流域コミュニティ」を提唱する。

一方、ミズナラやアサの森が広がる同町の赤谷川流域では「赤谷プロジェクト」が進んでいる。絶滅危惧種(国内希少野生動物種)のイヌシとクマタカが共存する貴重なエリアで、それらの生息環境の向上や、スギ、カラマツなどの人工林を自然林に戻さることが目標。同町は谷川岳のエコツアーにも参加した。

B.R.では生物多様性を保全する「核心」、学術的研究支援を行う「緩衝」、社会と経済を連携させる「移行」の三つの地域を設定する。エネコエの「人間と生物圏(MAB)計画」の国内活動を支える、日本MAB計画支援委員会委員の朱宮文晴さん(47)は「日本自然保護協会所属」は「みなかみは、上ノ原のような移行地域で都市の人々の協力を得ながら自然資源を持続的に利活用している」と評する。「これからは管轄の自治体も専門職員を置くなど体制の充実が求められる」と朱宮さん。B.R.の登録はゴールではなくスタートだ。【明珍美紀・写真も】



野焼きの作業を手伝う人々。首都圏から家族での参加が目立った「群馬県みなかみ町」の「入会」の森」で